

多賀工業会 東京支部会報

1999年3月 第2号



千鳥ヶ淵の桜

東條会館ご提供

— 目 次 —

	表紙に寄せて……………編 集 部……………表紙裏	
挨拶	多賀工業会創立60周年記念総会を迎え……………渡辺 益男…………… 1	
随筆	金 運……………石川 守竹…………… 2	
	小説「名人」と四国同期会……………小白井和典…………… 3	
	生涯現役……………米澤 潤…………… 4	
	つれづれに思うこと……………山口 宣之…………… 5	
	子育てを通じて思うこと……………森 昭寿…………… 6	
紀行	モンゴル共和国ウランバートル旅行記……………小室 秋夫…………… 8	
俳句	祭の俳句……………橋本 久美…………… 11	
	俳句2句………………………… 11	
記事	第18回東京支部総会報告記……………幸道 貞一…………… 11	
	東京支部役員名………………………… 13	
	多賀工業会創立60周年記念総会行事	
	並びに第19回東京支部総会のお知らせ…………… 14	
	会員消息………………………… 15	
	今では夢のよう………………………… 15	
	お誘い………………………… 15	
	平成10年会費納入者………………………… 16	
	編集後記……………裏表紙裏	

表紙に寄せて

編 集 部

東京の桜の名所の中でも千鳥ヶ淵の桜というと上野公園・隅田川畔の桜と違った趣を感じさせます。

旧江戸城の濠・石垣を前にし、その上近くには英国大使館もあり、お花見の人々も行儀よく騒いでいるような感じがします。

その千鳥ヶ淵の桜花の下 から石垣・城門を入れて撮りました写真を本号発行の季節に合わせて表紙としました。

多賀工業会創立60周年記念総会を迎え

東京支部長 渡辺 益男（昭19専精）



今年60周年を迎える多賀工業会記念総会は、東京支部が企画を担当することになり、会場を箱根ホテル芦ノ湖園と致しました。この会場は、原動18年卒東條重男様が会長をされているホテルです。日時は平成11年5月22日（土）～23日（日）を選び、参加者全員が宿泊できるよう考えました。

かつては、人生50年という諺がありましたがそれより10年多い60年とは何時の間にやら随分月日を重ねたものとおどろ

きさえ感じます。我々の同窓は、今日まで産業界をはじめ、広い分野で大変な活躍をして居ります。60年前を振り返ると世界大戦前夜で何も彼も軍事色に色どられ、わが母校の学科も機械・精密・金属・電気と重工業指向の出発でした。

この戦争は、日本にとって悪夢のような時代で、母校は、寮・官舎等艦砲射撃で破壊され、早川校長御一家は、直撃弾で亡くなられてしまいました。

昭和20年敗戦時、私は、軍隊から軍服のまま帰郷し、戦後の生活準備のため、学校を尋ねるべく、日立駅に下車しました。日立駅プラットホームで目にしたことは、日立製作所のあった海岸側は全ての工場が焼けただれたような鉄骨の残骸を残すのみで、その向こうには、海岸が見え、打ち寄せる白波が今も思い出される映像となって焼き付いてお居ります。

また、市街地側は、学生時代記憶した街並みはなく、全ての建物は廃虚となり、日立鉦山が目の前にせまって居りました。その頃、産業界は破壊状態で働ける職場は殆どなく、東京をはじめ多くの都市の街中は、よれよれの軍服をまとった復員者風の人々が浮浪する姿のみ目立っておりました。

世界は、ソ連が鉄のカーテン、中国共産国家が竹のカーテンといわれたように、自由圏と共産圏に2分され、激しい覇権争いが続けられ、独逸や朝鮮は、東西又は南北に分割されて居りました。この頃発生した朝鮮動乱で日本は朝鮮戦線の南側兵站基地として、特需景気が発生し、産業界復興のチャンスとなりました。

一旦産業界が、活動するようになると教育レベルが高く、且つ勤勉な日本人は、世界の注目をひくようになりました。

昭和30年代には、本田技研・ソニー等戦後に生れた会社群がリーディングカンパニーとして、注目される一方、旧財閥系大企業群も次々と復活致しました。

昭和39年東京オリンピック時には、東京の環状高速道路や東海道新幹線も完成し、世界中の注目をあつめました。

昭和45年の大阪万博以降も更に経済界は、躍進をつづけ日本は世界の生産工場とさえ、言われるようになりましたが、貿易摩擦や円ドルレートの乱降下など新しい国際問題を生む結果となりました。

このような躍進期にわが同窓は、各界の中枢にあって実力を発揮してまいりました。このように、我々お互いは、走馬燈をみるような慌ただしさの中で頑張ってきたことが、今では懐かしくさえ感じられるようになりました。

もう2年もすると、21世紀を迎えることになりますが、過去の歴史を振り返ると世紀末には、社会の構造、芸術や思想の分野ではげしい改革運動が発生して居ります。

20世紀から21世紀の移行に当たっても経済、芸術、思想等多分野で、波乱が予想されるように感じられます。

我々にとって同窓の親睦、団結、努力はいつの時代でも何物にもかえ難い貴重な財産です。
さあ、皆さん、60周年記念総会には、明日の希望を語り合う為に万難を排して、箱根芦ノ湖園に集合しましょう。

金 運

石川 守竹（昭24専舶）



「これがお前の一生の運勢だそうよ」と母に言われて見せられたのが、5～6枚の和紙に墨字で細かく書かれたこより綴じの文であった。小学校の低学年の頃である。

父母の結婚の仲人が自分の運勢があまりにも悪いので易を学び、そして私が生れた時に私の運勢を占ってくれたのがこれであるとのこと。

その頃は人生これからという年頃であった故か、あまり興味も湧かなかつたので熟読しなかつたが（この文はその後行方不明）、全体を通してはくの中の上位であったと記憶している。

その中に二つのマイナス運が載っていた。その一つが若い時期に不治の病にかかるというもので、これは先ず見事に当たってしまった。社会人になって3年目の春の検診で結核と診断され、丸2年間休職した。当時結核は不治の病といわれていた時代だ。従ってこれを指すのだなと思った。然し、戦後急速に進歩した医療のおかげで完治した。でもこれで、その一つはクリアしたことになったようだ。

二つ目が金運には縁が無いということであった。だがこれには但し書きがついていた。大金には恵まれないが生活には困らないだけの小金は何やかにやと入ってくると。従って、金目当ての誘惑には絶対に手を出さぬようとのことだった。

その後成長するにつれ、自分には全く金目当の賭け事にはツキはないのだと実感するようになり、あの文のいましめが本当だと思うようになっていった。

今日迄く中元・歳末売り出しのクジ引きでは四等が最高、くお年玉つき年賀状は封筒・便箋迄く宝くじは5年間毎月続けて買って見たが全部は外れ。ところがグループの当番、監事等を決めるクジ引となると結構当たる。

そういうことが重なってきて、やはり自分には金目当てで手を出した時にはツキが廻ってくることはないのだと確信するようになった。それで金に関するオールORナッシングの賭け事には一切手を出さない。だが困った時には何となくそれを乗り切るだけの金は入ってくるので益々あの文面を信ずるようになり、何か金に困ると今では「なあーに、何とかならあーな」という気持ちで、それをまた口にも出すので家内など「またお父さんのなんとかならあーなが始まった」と笑うが、当人は本気でそう思っているのだから世話はない。

独身時代、職場で自分より若い者が「石川さんに奢って貰うのはちっとも悪いなあーという気にならないんだよなあー」と話しているのを聞いて「人の財布の中身も知らないでいい気なことをいってやがる」と思ったが、彼等から見るといつも財布は豊かであると見えたらしい。

私が独身時代にそろそろ終止符を打たなくてはと思い始めた時に、母が60才で2ヶ月入院しただけで突然亡くなった。手遅れの胃痛だった。この時はさすがに困った。父は私が6才の

時死亡。病院の支払いは1週間毎に現金支払いであり、私の給料ではとても足りない。幸い母の貯えが多少あったので補いはついたが、母が亡くなったそのあとの葬儀費用、相続税（その当時に私の給料の約6ヶ月分位）にはとうとう音を上げ、会社より2年間分割払いで借りた。そしてその年の暮れに会社よりの借金を抱えながら見合いをし、翌年母の一周忌が終わってから結婚したが、この費用が全くない。会社も借金がまだ半分以上残っているので追加貸しはダメだという。そこで同僚のH君に相談したら「では俺の名前で借りてやるよ。だが俺も給料日に引かれるのだからその分給料日には必ず返してくれよ」。これで助かったが、家内はまさか借金つきとは知らなかったと今でも覚えていて言う。家計のやりくりには相当苦勞したらしいが、それでも何とかこなしてしまった。

平成元年、バブル期の最中に銀行からもすすめられて自宅を建て直したが、バブル期なので銀行も気前よく余分に貸してくれたので余った金をもっと増やしてやろうと株を買ったら金目当ての運はやはりついていないようで、あれよあれよと、見る間に1/3に減ってしまった（世間一般がそうであったと自ら慰めてはいるが）。癪にさわるので全部売ってしまったが、それでも1/3残っただけでも宝クジや競馬よりはまだまだましであろう。

平成9年の10月頃のことである。山一証券の株が大分下がってきたので一寸慾が出て、これで少しでも前回迄の株の損失を取り返してやろう、万に一つも山一が潰れることはあるまい、今に必ず上がるだろうと自信をもって買って置いていたが、その後下る一方。そして遂に或日一夜明けたら全くのペア！。

あまり見事にやられたので証券会社より本券を貰ってアルバムに貼ってあるが、金運の無い奴はやはり無い！。

小説「名人」と四国同期会

小白井 和典（昭28学機）

囲碁資料室が神奈川県津久井町コミュニティハウス内に在ることを知った。平成10年10月24日松戸駅から千代田線、小田急線と乗り継ぎ町田駅でJR横浜線に乗り換え橋本駅下車、北口バスNO.1乗場から終点三ヶ木^{みかぎ}まで乗り10分ほど歩くと到着である。ここで小説「名人」を知った。囲碁に関心のある人なら第二十一世本因坊秀哉^{ほんいんぼうしゅうさい}名人の名や打碁集を眼にした事があるかも知れぬ。名人は昭和15年1月10日朝、熱海の「うろこ屋旅館」で亡くなっている。数え年67才であった。川端康成はこの秀哉名人の引退碁を観戦し、新聞に観戦記を連載したのは、昭和13年6月から12月にかけてであった。小説「名人」と題して昭和17年8月に発表したのが、この時は未だ想熟せず中絶し、昭和26年8月に到って稿を改めて書き出し完成したものである。小説「名人」を新潮文庫（平成9年8月15日三十五刷）で読み本因坊秀哉名人が勝ち昇って来た若き日の故木谷実九段（当時七段）との引退碁の一戦の詳細を知った。プロ棋士の頂点に立ちその名誉にかけての、例のない持ち時間各々40時間宛の長丁場を斗って「不敗の名人」は、引退碁に敗れた。二百三十七手黒五日勝ちであった。「名人」の中に『碁が高まり深まったのは日本人によってであった。昔中国から移入した多くの文物が中国でみごとに発達していたのちがって、碁は日本でみごとに発達した。中国で仙心の遊びとされ神気がこもるとされ、三百六十有一路に天地自然や人生の理法をふくむという、その智慧の奥をひらいたのは日本であった。外国模倣輸入を、日本の精神が超えたのは碁に明らかであった。碁・将棋

ほど知能的な遊戯も勝負事も、ほかの民族にはないかも知れない。碁は、能や茶のように、日本の不思議な伝統に深まったのだろう』と述べている。秀哉名人の生涯は、勿論のことであるが、川端康成という文豪の研ぎ澄まされた文章に、文学とは凡そ門外漢の私であってもその美事に感動させられた。

話はわかる。平成10年11月21日懐しいYさんから電話を受けた。Yさん、Qさんが四国八十八ヶ寺遍路旅結願けつがんになった。何処かで集りたいが・・・。仲間は、Y、QさんとFさんと私の4人。12月6日新宿で会う事になった。私は平成6年8月20日満66才で会社を退き、亡き母の願いでもあった四国八十八ヶ寺遍路旅に出ることにした。平成7年4月4日～8日4泊5日第一回。5月15日～20日5泊6日第二回。10月16日～21日5泊6日第三回。朝日旅行会霊場巡りツアーに参加しての遍路旅で結願けつがんした。翌平成8年は、全十一回月一回の同旅行会ツアーで坂東三十三



平成9年11月13日写す

観音巡礼けちがんの旅結願。昨平成9年は3月11日～14日3泊4日第一回。6月10日～12日2泊3日第二回。9月9日～11日2泊3日第三回。11月11日～13日2泊3日第四回。で西国三十三観音巡礼けちがんの旅結願。この西国の旅で奇しくも4人は9日間同室であった。私とFさんは四国遍路は巡拝済みで、Y、Qさんは翌平成10年の予定と言う話だった。これが日出度く結願けつがんとなったという訳である。Y、Qさんの平成11年四国八十八ヶ寺の番外二十ヶ寺を再び4人での旅にしたいとの発案で皆夫々

薬を携えて行くこととなった。

遍路の心得は三つある。一つ同行2人の信仰に励む、二つ何事も修業で愚痴妄言を慎む、三つ現世利益れいせいりやくの霊現れいげんを信じ八十八の煩惱を消滅するにある。参詣は本堂、大師堂の順に夫々先達せんだつさんの発声はつせいに副まかって ①懺悔文ざんげぶん ②開経偈かいぎょうげ ③般若心経はんにやしんきょう ④光明真言こうみょうしんごん ⑤高祖宝号こうそほうごう ⑥回向文えこうもん を奉唱して次の寺に向うといったものである。

来る平成11年は川端文学を読むことと、久しぶりに、四国同期会と名付けた仲間達と四国遍路巡拝の旅が、カレンダーに記されること、なる。

生涯現役主義

米澤 潤（昭30学電）



私は昭和30年電気工学科を卒業と同時に日本アイ・ビー・エム社（以降IBMと表す）に入社した。スタートはハードのエンジニアだったが、30才の時、最新超大型機による科学計算センターが発足し、そのシステムの責任者になった。それ以降はコンピュータの発達と共に、次々に新しいビジネスの立ち上げを手が

ける運命をたどった。それらはどれも新しい技術の習得、前例のないビジネスを軌道に乗せる、そして年々増える社員の育成と、実にエキサイティングで、しかも労力を要する仕事であった。4時間睡眠体質もこの頃出来上がったと思う（今は5時間睡眠）。或る時期、人材育成も素人芸では不十分と思ひ、日本生産性本部を始め、多くの機関や学校に出入りし、専門家の指導を仰いだ。その一つに産能大があり、当時そこの学長をなさっていた都崎雅之助先生に、お目にかかる機会があった。此の時の勉強のまとめとして、人材のキャリア・プログラムを開発して、自部門の適材適所配置のツールとして使った。

このプログラムは、後年日本IBM全社に拡張使用され、30年を経ても生き続けている。実用的なところが認められたらしい。キャリア・マネジメントを進める中で、「生涯現役主義」を貫いて欲しいと吹き込んでいた。

自分が50代中盤に入った頃、ネオダマと言う言葉が世の中を走りまわった。これはネットワーク、オープンシステム、ダウンサイジング、マルチメディアが同時進行し、コンピュータの使い方、あり方が根底から変るぞと言うものだった。新しいビジネスばかり手がけてきた人間にとって興味津々の世界の到来だ。だが具体的なことは全く分からない、今迄もそうだった、お客様と共に作り上げるしかない、やってみたい、これを最後の仕事とし、生涯現役主義の仕事とするか、等々自問自答の末、会社を創ることにした。早期定年退職の資格（55才）を待ちながら準備し、計画通り実行した。新会社名をコンピュータとネットワークを一体と見たサービスを提供する会社の意味でジャパン・コンピュータ・アンド・ネットワーク（JC+N）とし、LAN・WANの設計・施工及びその後の運用・管理・メンテ事業とした。数名で試行錯誤から始まったが、お客様のご愛顧のおかげで、10年を経て50人の会社になった。此の業界は技術革新が極めて激しいが、若者達は、嬉々として、それに立ち向かう。社員の8割が30代以下で、毎日フットワークよく、エンドユーザーのお助けマンを演じている。私は彼等と対等につき合い、相談に乗ったり、即決したり、環境整備をしたりが役まわりだ。商品開発などは歳を忘れて仲間に入る、適度の緊張が気持ちよい。休日は陶芸、書等に興じ、緊張が切れない様にしている。又健康維持と称してタクシーを使わず歩いてケチを実践している。私なりの生涯現役主義はこんなところに落ちつくようだ。

※写真は1996年9月渋谷の東急百貨店本店で、仲間と陶芸展をやりまして、自分の作品を前に家内と共に写ったものです。

つれづれに思うこと

山口 宣之（昭35学機）



ついこの間まで還暦と聞いてもまだまだ先のことだと思っていた。還暦と言えば相当年輩の人のことであり「自分のこと」とは考えてもいなかった。テレビなどで60才、61才云々が等と言っているのを聞いていても年取った人がいい年をして、と他人事のように思っていた。しかし思えば自分もその年になっていたことに気がつき愕然とする。人間というものは幾つになっても自分だけは何時までも若いつもりでいるも

のだと思う。

年をとってくるとだんだん愚痴が多くなる、みんなの前で愚痴ると嫌がられて相手にされなくなるのでぶつぶつと独り言が多くなる。年寄りはどうしてああ愚痴と、独り言が多いかなと思っていたが、自分も次第にそうやってきたのに気がつきいよいよ年寄りの仲間入りを

したのかと思う今日この頃である。しかし、愚痴もこぼさないとストレスが溜り健康に良くないので「つれづれに思うこと」を述べさせて戴きストレスの発散をさせて戴きたい。

最近のテレビ、新聞紙上を賑わしている様々の事件を見ているとこのいい年をした人達が子供じみた幼稚なことをしている。嘘をついたり、それがばれるとつまらない弁解をしている。古くは友部議員、最近では中島議員や詐欺師のように初めから人を騙すつもりでやるならいざ知らず、真面目なサラリーマンが最初はほんの些細な事で、本人達は会社のためによかれと思ってやったのに。その時点ですぐ謝ってしまえば問題にもならず済んだのに。一度嘘をつくとそれを正当化するために次々と嘘をつき続けねばならず、最後に全部ばれてしまい気がついたら大問題になっていたと言うことは多々あることである。これが新聞種ともなるとサラリーマンとしての一生を棒に振ってしまうことになる。私も会社生活四十年、定年を過ぎてまあ何とか勤めさせて貰っているがサラリーマン生活を長いことやっていると嘘もつかざるを得なくなることは幾度もある。サラリーマン社会の全体の流れの中で一人だけ良い子になるのは難しい、また一人だけ抵抗して長いものに巻かれないと村八分にされかねない。大の大人が集って何故そうなるかと一般の人は不思議に思うだろうが、普段からそうせざるを得ない仕組みになっていると言わざるを得ない。その会社社のそれぞれの体質がありそれがなかなか変わらず、新入社員が入って来ても遠からずその体質の中に慣れ親しんでしまいおかしいと思わなくなっている。これは日本人の本質とも言える。一つの群れの中の一員として特出しては生きては行けないのかもしれない。山一証券しかり、NECしかり。

最近の子供の育て方を見ていると、世の中昔の農耕民族の母系社会に完全に戻ったように思える。それでも昔は忙しくて子供に手を掛ける暇がなかったから未だ良かったが、今は暇を持って余した母親達が子供べつりの生活をしている。多くの家庭では子供は親離れをしたがっているのに、親は子離れが出来ないでいる。特に母親は同性である娘は放っておけるのに、息子は父親みたいにしたくないとか言って干渉しすぎるきらいがある。結果的に発展的な女性が多くなる中で男性が軟弱化し愛玩動物的なが増えてきている。テレビの大河ドラマ等を見ていると武将が泣く姿が見受けられるし、スポーツでも勝っても負けても良く泣いている。我々は子供頃から男の子は涙なんか見せるものではないと躰けられたものである。最近年上の女性と結婚する男性が多くなって来ているのも母親への甘えの延長かもしれない。「一つ年上と三つ年上は金の草鞋履いても探せ」と言われている。何時の時代から言われたのか知らないが少なくとも戦国時代ではなさそうだ。こういう言葉が昔からあるところを見ると現代と同じような時代があったのだろう。歴史は繰り返されていると考えれば将来の事をあまり心配する必要がないのかもしれない。

子育てを通じて思うこと

森 昭寿（昭59学機）



茨大を卒業して10年以上経過している。私は家を離れて入学したので、親と同居していた時間と別に暮らした時間がほぼ同じになってきている。その間を振り返ってみると、環境が大きく変化したのは、実家を出た時、そして子供が生まれた時である。特に子供が生まれてからは生活の仕方ばかりでなく、物の考え方も随分と変化してきた。この会報を読んでおられる大先輩の方々に前にして多少恥ずかしいのであるが、現在

5才と3才の子の子育てを通じて体験したこと、感じたことについて書いてみたいと思う。

出産前：みるみると変化していく妻の体型を眺めて「人間は動物なんだ」と改めて思わされた。数kgの重りを四六時中抱えていなければいけないのであるから、とてもしんどそうであった。それにしても腹の中で自分の意志とは無関係に動くものがあるという気持ちはどういふものなのだろう（申し訳ないが）。考えただけでも気持ちが悪くなる。女性とは、何と凄いのだろうと感じられたのだった。

出産：実家で出産するケースが多いのだろうが、妻は二人とも近くの病院で出産した。幸運だったのはどちらの場合も、産後に長期休暇（正月休みと夏季休暇）が取れる時期だったことである。「産後は水に触れさせないように…」という諸先輩達のご忠告により、炊事や洗濯、おむつ洗いや何でもやらざるを得なかったので、少々大変だったが、公園などで近所の若いお母さん達と話しをするという楽しいこともあった。

赤ん坊：病院で初めて抱いた出産直後の子供は「スターウォーズ」のヨーダのようにしわくちやで、小さく、ちょっとどうにかしたら壊れてしまいそうだった。「これが人間なのだろうか」と戸惑いを感じずにはいられなかった。

沐浴：保健所で行われる母親学級で沐浴指導の時だけまれに父親が出席する。実際に子供の沐浴をする時には男性の手のひらぐらいの大きさがないと、赤ん坊の首を支え、さらに両方の耳を親指と小指で押さえる（水がはいらないように）事ができないのである。また、この時初めて知ったのがへその処置（消毒など）が必要な事。考えれば傷口なので当たり前なのが、全く考えたことが無かった。

夜泣き：育児ノイローゼという言葉を知り、多少なりとも理解する事ができた。夜中に泣き止まない子供を抱え、途方に暮れる。具合が悪いのでも、お腹がすいているのでも、おむつが汚れているのでもない。ニュースを見ても人事とは思えなくなった。

個人差：同じ親から生れ一緒に生活しているのだから、そんなに違う子供ができるわけが無いと漠然と思っていたのだが、二人の子供は多くの面でまったく違っていた。父親の添い寝でも眠れるか。母乳か、ミルクか。何ヶ月で立ち、歩き始めるのか。話せるようになるのはいつか、など。マニュアル通りになどならないことがよく分かった。

チャイルドシート：車に乗る機会が多いのですぐにチャイルドシートを手に入れ、今はジュニアシートになっている。最初は気に入らないようだったが、程なく二人とも自分から座るようになった。思わぬ効果があったのが、飛行機に乗った時にあまりぐずらなかつたことである。車内で子供を自由にさせている車を見ると、よく平気で運転できるものだと、恐ろしいやら感心するやら複雑な気分がしてくるのである。

思い付くままにいろいろ書いてきたが、親は気に掛けたり、世話を焼いたりして、あたかも育てているように感じてしまう。しかしながら何のことはない、子供達は勝手に大きくなり、いろいろなことを覚えたり考えたり、体験したりしている。どちらかという育てられているのは「親」の方だったりするようである。まだまだ私共を育ててくれそうな二人の子供たちである。

以上

平成10年10月31日撮影



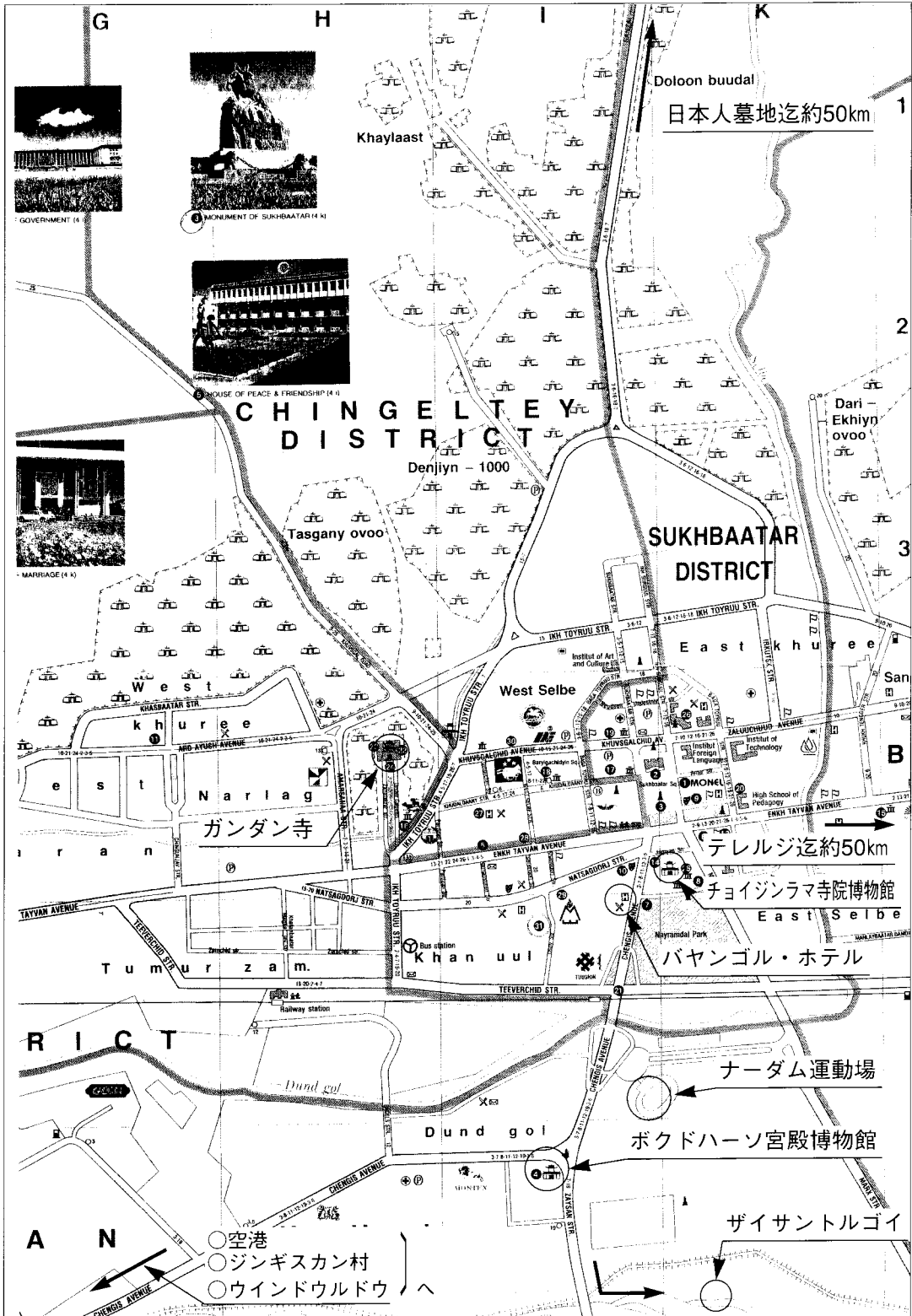
長男 雅寿（4才10カ月）

二男 拓（3才4カ月）

モンゴル共和国ウランバートル旅行記

小室 秋生 (昭32学電)

ウランバートル案内図



モンゴル共和国国鉄にODAで活躍されている玉川信二さん(昭28学電)の誘いを受け近江義勝さん(昭28学電)小白井和典さん(昭28学機)の3人でウランバートル中心に1998・9/16～9/23の間、旅をしてきた。

ウランバートルにはモンゴル航空が関西空港とウランバートル空港間、週2便(水曜日、土曜日)片道3時間48分で運行しており思ったより近い国であった。

旅は予期せぬことから始まった。台風4号が急速に発達9/16東海、関東地区に午前中上陸の報道があり、急遽9/15羽田発の遅い便で関西空港へ飛び一泊した。先輩2人はベンチに横になるとスヤスヤと寝入った。

翌日関西空港では出発迄時間があり関西空港見学2時間コースで見学した。案内嬢によるVTR、空港は設備説明、更にバスでの空港案内、今後の計画などを見聞きた。これは旅行の番外編であったが時間があつたら一巡するのも良い。

9/16.15時関西空港を立ち19時ウランバートル空港に到着。時間差はないが体感的には2時間位あると感じた。玉川さんが出迎えてくれ、さらに明日から三菱パジェロで運転してくれるドイツ君(工科大学5回生)を紹介された。今日から寝泊まりするバヤンゴル・ホテルに行き、ここで明日から案内してくれるパーサunker女史(北京大学卒中国語・日本語専攻)を紹介された。これらは全て玉川さんの配慮による。

モンゴル共和国は魚の形をした国で、人口約243万人面積156万km²で日本の約4倍の広さの国である。首都のウランバートルは人口約65万人面積1360km²の都市で、札幌、パリなどと同緯度にある。4つの発電所が稼動しており、工業化への道を進むと同時にその排熱を利用した家庭への給湯設備、家庭電化の進んだ都市であった。

9/17玉川さんの縁で友人から「兄が『青い空』サーカス団長をしており、サーカス劇場でイタリア興行師の為に選抜会をやるから見せても良い」との話があり、それを観劇した。観客は興行師と関係者、それと我々6人であった。内容は馬頭琴など民族楽器演奏、男女歌手の歌、我々を歓迎する赤トンボの唄を歌ってくれた。創作劇「蒼き狼と雌鹿の恋物語」は特に素晴らしかった。他に4人の少女の天女の舞、組体操、空中ブランコ等も大変良かった。1999年には日本公演をすとの団長の挨拶があった。

☆市内の主な観光

1. ガンダン寺

1883年建立。旧ソ連邦の仏教弾圧にも拘わらず市内で唯一生き残った寺院。大講堂では午前中勤行が行なわれていた。観音像には再建された25米の観音像が安置されていた。



ガンダン寺

小生 小白井さん 近江さん

2. ボグドハーン宮殿博物館

19世紀末、釘を用いず建立された王宮兼寺院で、黄色い宮殿と呼ばれる。王宮には王の調度品、献上品、寺院には仏教中興の祖ザナバサル作の金銅仏、タンカ(掛軸式仏画)が多数あり、見応えがあった。

3. チョイジンラマ寺院博物館

1908年建立。仏教舞踊のお面、地獄絵など多数あり。特に奥の院にある男女合体金銅仏二体は素晴らしい。

4. 自然史博物館

恐竜骨格化石三体は圧巻。恐竜化石多数と動植物鉱物の標本多数有り。

5. 民族歴史博物館

先史時代から現在迄解りやすく展示されていた。

6. 美術館

モンゴル国旗を創案したザナバザールの金銅仏他仏教絵画多数有り。

7. ザイサントルゴイ

ウランバートル市南の丘の上にあり、市街が一望できる。丘の上には第二次大戦のモンゴルとソ連の日本及びドイツに対する戦勝記念碑があった。

8. 劇場で「モンゴル民族の舞踊と歌」を鑑賞するとよい。仮面踊り、少女の天女舞、民族音楽演奏、男女歌手の歌など素晴らしい。

☆市外の主な観光

1. テレルジ

ウランバートル東北東約50kmの保養地。軽井沢を思わせる地で、ホテルあり、ゲルにも泊まることが出来る。途中奇岩あり。巨大な亀石の所で一服していると、はるか彼方からモンゴル人が馬2頭を連れて我々を訪問してきた。ビールで乾杯。我々も連れてきた馬にのせてもらった。

2. ウインドウールドウ

ウランバートル西約50kmの保養地。ホテルにゲルの施設あり。途中バツタの飛ぶ音ギーギーと風の音しかない。360度開けた大草原でのビールの味は格別であった。途中ジンギス汗村あり。映画のロケ地であった所で、ジンギス汗の衣装を着け大王に変身出来る。

3. ドイ君の祖母のゲルを訪問

道なき道をドイ君が四輪駆動車を走らせること2時間。やっと祖母のゲルにつく。菓子パン、ヨーグルト、ミルクティを馳走になる、味は最高であった。ゲルの中にもテレビがあり、世界の情報が満ちていた。

4. 日本人墓地

第二次大戦後抑留され死亡された日本将兵の墓地がモンゴルの看視兵に見守られながらウランバートルの北50kmの所にあった。白い囲いは山腹の中程に浮き立っていた。



玉川さん
の友人

玉川さん

小生

小白井さん

肉の花正の入り口（日本のチェーン店）

モンゴルでは衛星放送でNHKが放送されているので日常のことが解り安心して旅行ができる。又、市内の交通機関は路線バスが縦横に走り不便はないが自転車は殆ど見かけない。バスを利用しない人は何処までも徒歩という不思議な国であった。1992旧ソ連邦からの分離独立後ジンギス汗の復活、誇り高い国民性、居住に対する自由な発想、高度な教育などを見聞きする時、更なる工業化の発展がなされるだろう。

今度訪問するとすれば、7月のナーダム6月～8月の大草原開花の時期に行きたいものだ。

今回の旅行はバーサンクー女史の適切な案内、ドイ君の落ち着いた運転に感謝し、玉川さんのご配慮に深くお礼申しあげます。 以上

祭の俳句

橋本 久美（昭28学電）

祭りというは吼洋寮の寮祭が懐かしい。部屋の中中に一本の番傘をぶら下げ、「カサブランカ」と銘打った飾りつけ、河原子浜でのストーム、その時の夜に光る海の色など、すぐに思い出される。若い頃の思い出はさて置き、祭祀、祭礼、所謂お祭りの俳句を楽しんでみませんか。

俳句で単に「祭」というと夏の季題となる。東京なら5月に行われる神田明神の神田祭や浅草神社の三社祭が有名。まさに夏来るの感を深める年中行事である。

神田川祭の中をながれけり 万太郎

久保田万太郎の俳句である。街の中を流れる神田川の静けさを詠むことで、祭りの笛太鼓や人々の賑わいが聞こえてくるようではないか。

日照雨祭神馬の蒼めける 久美
一步引き祭太鼓のばち構へ 久美
四尺の神輿向き変ふ大鳥居 久美

神田祭の由来は平将門の怨霊を鎮めることが中心にあったようで、山車の行列も将門塚に立ち寄り奉幣する。さらびやかな平安絵巻が繰り広げられる。

灯もして庫の神輿の磨かるる 久美
仲見世に子の掲げ来る金魚かな 久美
見送りて三社祭のびんざさら 久美

現在の浅草寺に祀られる観音像を隅田川から発見した三人を祭神とする浅草神社の三社祭も人々の血を湧き立たせる。

浅草の大通りを埋め尽くした群集の頭上を夕日を浴びながら大神輿が渡御する。遠くから見ると、あたかも夕日の中を船がゆっくりと進むように美しい。

遠神輿船出のごとく夕日のせ 久美

お祭りの神輿、山車、笛太鼓、衣装など伝統的な事物は時代の変化に拘わらず引き継がれ衰退することはないようだ。そこには日本人の持つ郷愁や逞しいエネルギーが強く感じられる。

俳句 2 句

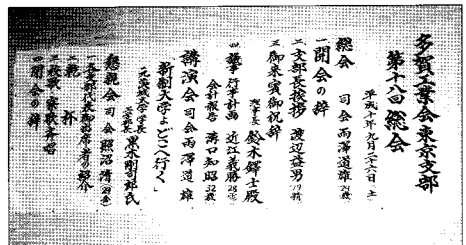
小白井 和典（昭28学機）

老いの身に時の流れの早瀬かな 林 詮（昭17専金）
日本画展球子の富士や春浅し 小白井 和典（昭28学機）

第18回東京支部総会報告記



講演中の黒木剛司郎氏



式次第

第18回支部総会は、平成10年9月26日（土）、東條会館で総会、講演会、懇親会の順序で開催されました。今年の司会は29年の方をお願いすることになり、総会と講演会は雨澤道雄氏（29学機）、

懇親会は照沼清氏（29学金）にお願いしました。会員の出席は約100名で盛会でした。来賓として本部より鈴木理事長、各支部からは千葉（三幣支部長）仙台（綿引支部長）日立（櫻村支部長）埼玉（原田支部長代理）の出席を賜りました。今年は東京支部会報の創刊号が、石川編集長の努力で、予告通りに7月に発刊の運びとなり、約千名の会員に送付して年会費2千円の納入方を依頼した結果、総会までに順調に納入されつゝあり、今後の支部活動の活性化に貢献すること大であります。

講演会には、多賀工業会にご縁の深い黒木剛司郎先生をお招きして、「新制大学よどこへ行く」と題して新制大学が発足して半世紀を迎え、変革の時機に直面している問題をとりあげ、その背景について色々の角度から問題点を整理、今後の大学の進むべき方向について、率直な御意見を開陳され大いに啓発されました。黒木先生は大正9年のお生まれで78才ですが、元気澆刺、論理明解で感服させられました。先生は昭和27年から63年迄37年間在籍され、主として機械工学科で、材料力学を中心に教鞭をとられ、その間工学部長を2回、昭和57年には茨城大学学長に就任されました。人に歴史ありと申しますが、工学部の歴史は正に先生と表裏一体となって発展してきたと言えるでしょう。

懇親会は各支部代表でご出席者の紹介に始まり、渡辺支部長の乾杯の音頭で賑やかに開宴し、お互いに旧交を暖め歓談し、校歌、寮歌の合唱の頃は肩を抱きあい大いに盛り上がりました。来年は新制大学発足から五十周年を迎えます。お互いに元気で頑張りましょう。

多賀工業会東京支部会計報告

期間 自平成9年4月1日 至平成10年3月31日

収入の部 (単位 円)	支出の部 (単位 円)
前期よりの繰越金 385,210	第17回総会費 1,130,635
本部援助金 250,000	懇親会 859,400円
第17回総会会費 1,175,000	講演講師謝礼 50,000円
(工専) 1万円×54名 540,000円	出席者名簿作成 50,925円
(大学) 1万円×62名 620,000円	総会案内状印刷 (往復葉書千枚) 125,200円
(大学) 5千円×3名 15,000円 (女性)	来賓土産 15,400円
雑収入 預金利子 148	雑費(交通費・コピー代) 5,560円
	懇談会 (植田先生、支部長他) 24,150円
	会議費 279,656
	総会開催準備幹事会 30名 139,639円
	幹事会5回 延べ31名 140,017円
	他支部総会参加費 91,740
	埼玉、栃木、千葉、いわき、仙台支部
	支部対抗ゴルフ参加補助 (4名) 40,000
	通信費 18,220
	事務用品・雑費 15,505
	次期繰越金 234,602
1,810,358	1,810,358

上記の通り相違ない事を認めます。

平成10年 3月31日

会計係 溝口 知昭

監査 近江 義勝



(幸道 貞一 記)

東京支部役員名

(平成10年9月現在)

支部長

渡辺 益男 19専精密 0424-63-9665

副支部長

市島 健男 18専金属 03-3990-6431

幸道 貞一 22専通信 045-731-1738

石川 守竹 24専船用 03-3328-4101 (会報編集担当)

渡邊 貢 26専原動 03-3300-1674

近江 義勝 28学電気 03-3811-7088 (事務局担当)

鈴木 日出男 30学原動 0485-92-2889

会計幹事

溝口 知昭 32学機械 0493-25-1683

学年幹事

高津 得一 17専機械 0423-24-2189

宮田 保之助 19専通信 045-871-3031

金原 正 20専電気 0422-32-2959

立花 浩 22専機械 048-882-6460

岩下 晃 23専通信 0473-52-6293

梅田 政夫 23専機械 0423-75-4613

飯島 公正 23専原動 045-383-2917

高橋 章 25専通信 03-3395-3320

加藤 達男 25専精密 03-3717-0908

関内 正 26専精密 0425-94-7610

菊地 玲二 26専通信 03-3467-0201

生田目 喜敏 28学機械 045-891-5149

柳沢 裕 28学原動 03-3998-5767

雨澤 道雄 29学機械 03-3489-6193

藤井 俊祐 29学機械 03-3333-3409

照沼 清 29学金属 03-3414-6437

米沢 潤 30学電気 044-966-2048

高橋 義博 31学機械 03-3932-0410

榊原 康夫 32学原動 0473-63-1017

田代 日出夫 33学原動 03-3389-2252

柴田 三夫 34学機械 03-3642-9304

織内 勲 35学電気 0473-53-7707

飛田 孝雄 35学化学 03-3708-5738

岩橋 靖雄 36学電子 045-713-5112

笹生 右 36学機械 045-783-1364

宮沢 信夫 37学機械 044-855-9356

駒場 方耀 38学機械 0426-65-8387

坂野 栄 38学電気 0297-74-0050

持田 幸武 39学機械 045-891-5245

渡邊 謙一 39学電気 0427-99-1056

武田 紀男 40学機械 03-3385-3487

梅村 和史 41学電気 03-3424-7375

菅谷 禎男 42学機械 03-3402-4090

浜野 紘一 42学電気 0471-84-7055

辻村 勝利 43学機械 0427-47-4848

芳賀 重臣 44学機械 0466-23-0088

依田 連平 17専金属 044-966-7599

梅田 智良 19専通信 03-3750-1427

内山 哲夫 23専機械 0423-84-5414

難波 靖治 23専機械 048-881-1216

宮本 長覚 25専機械 0422-22-2965

京野 五一 25専精密 03-3235-2748

葛目 義郎 26専金属 045-231-1653

宮本 昇 28学機械 0422-22-2951

赤城 清 28学金属 03-3381-6790

今村 純一 29学機械 0463-93-8085

森 章太郎 29学電気 0423-84-1433

三本木 武 30学金属 03-3961-0248

八城 宗敏 31学電気 03-3909-3854

田崎 耕八 32学電気 0423-42-2566

千葉 克男 34学電気 0425-84-9588

小島 正 35学電気 0425-41-9636

田尻 仁一 36学電気 0422-45-6359

小林 正巳 37学電気 03-3467-0415

兼子 八郎 38学電気 045-891-2232

綿引 貞男 38学電気 0473-37-5895

木村 彰良 39学電気 0468-73-6861

桂 暁彦 39学精密 045-823-5766

寺 紘一 40学精密 03-3819-2079

松本 隆義 41学金属 03-3776-5814

瀬谷 重信 42学精密 03-3338-2255

森田 徹郎 42学電気 03-5632-0360

永井 六夫 43学電子 03-3675-8273

安藤 雅 44学電気 044-955-8751

芝沼 弘充	45学機械	03-3680-6038	佐藤 充	45学電子勤	043-211-3577
安田 健博	46学電子	03-3439-5052	飯塚 英一	46学電気	045-755-1588
赤津 真	47学機械	03-3689-3452	永棟 敏夫	47学電気	03-3637-2732
石川 潤	48学機械	0923-34-3466	江本 恵昭	48学機械	048-463-8343
市川 義雄	49学機械	0422-21-8990	林 久夫	49学機械	0427-29-7933
浦辺 祐二	49学電気	0436-41-9645	金子 利久	49学化学	03-3620-6382
新田 明彦	50学化学	0485-93-2687	樋口 克美	50学電子	03-3940-6020
若林 雪生	51学機械	0424-87-3744	岡竹 芳彦	51学情報	03-3417-9418
坂倉 次男	52学機械	03-3787-1660	堀田 信昭	52学電子	03-3328-2934
西部 俊憲	53学情報	03-3725-8220	右田 一彦	53学電子	0471-43-7344
海野 光二	54学金属	03-3426-9322	鈴木 伸洋	54学電気	03-3430-9118
村上 大助	54学電気	045-826-3180	鈴木 俊民	54学機械	044-355-3838
平田 義雄	55学電気	0552-53-4025			
浜野 慶彦	56学電子	03-3905-4443	小川 洋司	56学情報	03-5997-9024
前田 賢二	57学電気	045-471-3827			
竹本 岩員	58学機械	042-551-7933			
岡田 和雄	59学情報	03-3995-8264	森 昭寿	59学機械	045-972-0186
加藤 宣和	60学機械	042-551-0416			
飯塚 明夫	61学電気	03-5682-1555	中村 幸久	61学化学	03-3967-5871
成相 恭一	62学電気	0423-38-1965	野田 季彦	62学電気	043-258-0828
文 泰三	62学情報	03-3845-6237			
野村 俊之	63学機械	045-431-5030	柴野 直樹	63学金属	03-3399-0805
石井 伸直	02学電子	043-274-8589			

注) 事情により役員辞任希望の方、交代希望の方(この場合は交代者指名)は事務局担当近江迄ご連絡下さい。

多賀工業会創立60周年記念総会行事並びに 第19回東京支部総会のお知らせ

今迄多賀工業会の節目節目にはその時代に合った企画で実施されてきましたが、今年の60周年は初めて温泉に浴し浮世の垢を流し浴衣姿で忌憚のない一夜を過しリフレッシュ致し度く、下記行事を企画しましたので多数の会員が参加されます様 お願い申し上げます。

記

1. 日 時 平成11年5月22日(土)～23日(日)
2. 場 所 箱根ホテル芦ノ湖園(全館貸切り)
(東條会館直営ホテル)
3. 会 費 ¥12,000(一泊懇親会費共当日受付で徴収)
4. 行 事 東京支部総会 pm 1:00(於1F 大広間)
本部総会 pm 2:30(於2F 大広間)
記念講演 宮田 茨城大学長(38電卒) 難波 靖治氏(23機卒)
懇親会 pm 5:00～7:00 ※催し物の囲碁、将棋、マージャンは当夜懇親会後に行う。
翌23日(日)の催しはゴルフのみで、観光は夫々自由行動とします。交通機関ですが小田急関連の箱根フリーパスの利用が得策と思います。
新宿より往復 ¥5,500(3日間有効) 小田原より往復 ¥4,130(3日間有効)

注1 22日(土)当日は箱根湯本駅より箱根登山バスにて元箱根行芦ノ湖園前下車が便利(約30分)
注2 表題総会に出席ご希望の方は必ず本部会報に同封されております返信ハガキをご使用下さい。更めて東京支部より出・欠の確認のハガキは出しません。

(尚、問合わせは近江迄)

◎ 会 員 消 息

ご冥福をお祈り申し上げます

訃 報

石井 善郎 (前東京支部長 昭16専機) 平成10年 8月 8日
長坂 英雄 (元 理 事 長 昭17専電) 平成10年 9月17日
吉田 穂 (昭19専機) 平成10年12月23日
東條 重男 (東京副支部長 昭18専原) 平成11年 2月22日

今 で は 夢 の よ う

筆者が在学していた昭和20年代前半頃は寮の裏の鮎川は清流で、6月頃には柳葉位の鮎が釣れたし、又崖下の深みには20匹程群をなしているのが眺められました。

秋、11月には隣室のO君と授業をさぼって裏山へ入り松茸を採った(2人で3本) こともありました。

鮎川河口の海岸では泳いで少し沖へ出るとワカメが採れ、それを砂浜で干して家への土産にした寮生もありました。

当時はそれ位学校・寮の周辺の自然は豊かでしたね。

(編集子)

遥かなるシルクロードの旅へのお誘い

シルクロードの起点となった面影が今でも残る西安、華麗な仏教文化を育んできたオアシス都市敦煌、天山山脈の麓のオアシス町ウルムチ、かつては数々の王国が築かれたトルファン、そんな町と一緒に行って見ませんか。

●期 間 6月頃 約10日 費用30万円

●連絡先 鈴木日出男(昭30学原)

●T E L 0485-92-2889(夜間)

年会費納入者 (敬稱略)

(平成10.1.1~12.31)

§ 寄 付

28. 原 山口 茂男 8,000
 19. 精 渡辺 益男 3,000

§ 年会費納入者

- | | | | | |
|------|-----------------|-----------------|----------------|------------------|
| ○16年 | 石井 善郎
小川 義夫 | 大矢 純一
敦賀 草三 | 坂本 衛
林 義雄 | 森本 裕
中村 和夫 |
| ○17年 | 岡崎 幸晴
久米 武男 | 高津 得一
志賀 武弘 | 足立 高嶺
渡辺 幸男 | 飯沼 直志
飯島 一昭 |
| ○18年 | 黒川 憲三
飯塚 節夫 | 田辺 良美
山本 栄治 | 依田 連平
東條 重男 | 鈴木 敏
市島 健男 |
| ○19年 | 関根 宗一
金子 恒雄 | 八角 方二
川尻 悦三 | 北条 英男
栃木 二郎 | 藤田 勲
白石 精 |
| | 飯田 栄三
田中 義一 | 小泉 篤
橋本 良夫 | 小泉 正男
柳田 裕美 | 渡辺 益男
浅見 隆 |
| | 岡部 萌生
梅田 智良 | 福水 久男
平野 祐三郎 | 遠藤 直亮
藪野 元伸 | |
| ○20年 | 岡本 公夫
山口 一郎 | 宮本 敏夫
引田 茂 | 吉成 実
小松 久一 | 海老原 謙次郎
加藤 康夫 |
| ○22年 | 柴田 信夫
梅田 豊治 | 竹内 靖夫
立花 浩 | 都築 久一
富山 栄 | 山内 宏
植田 英 |
| | 野尻 貞一
野坂 賢司 | 明石 和夫
幸道 貞一 | 土居 浩一
谷口 貞作 | 川崎 幹夫
保坂 博 |
| | 前田 豊昭
菊池 契吉 | 丸川 武志
田中 徹 | 三宅 信夫
石井 清 | 加藤 才輔
副島 邦夫 |
| ○23年 | 中村 弘
梅田 政夫 | 酒井 匡
高崎 伸夫 | 柴 智成
谷中 広 | 飯島 公正
菊池 秀利 |
| | 内田 昭三
蓑田 栄 | 藤原 昭平
村山 宣夫 | 黒坂 登吉
川田 昭 | 塩野 讓
馬場 昭 |
| | 鈴木 八夫
森尻 茂 | 荒川 栄一郎
森 | 近藤 善雄
平野 修 | 山本 衛 |
| ○24年 | 齐田 耕平
戸田 慶昭 | 眞中 和夫
桧山 広 | 海老原 和
平木 康一 | 白石 寿夫
高橋 章 |
| | 前川 信雄
飯野 二郎 | 石川 守竹
白土 四男 | 竹川 義美 | 杉田 尚 |
| ○25年 | 浦野 猛
忍田 邦夫 | 池田 善三郎 | 加藤 達男 | 京野 五一 |
| ○26年 | 宮本 長寛
板橋 博昭 | 渡辺 頁
葛目 義郎 | 関内 正
菊池 玲二 | 藤本 史郎
井坂 孝 |
| ○28年 | 有賀 久
滝田 隆彦 | 後藤 三郎
玉川 信二 | 生田目 喜敏
吉成 理 | 山口 茂男
今給黎 高俊 |
| | 小白井 和典
白瀬 達郎 | 中原 太平
池田 潤一 | 橋本 久美 | 大森 通 |
| | 稻見 孝
近江 義勝 | | | |

○29年	雨沢 道雄	今村 純一	大久保 半吾	石橋 弘
	森 章太郎	照沼 清	吉村 孝一	松田 良助
○30年	戸田 浜幸	鈴木 誠	石川 英二	大宮 武男
	鈴木 日出男	阿部 哲	木村 好延	黒沢 正蔵
○31年	早乙女 保二	横山 亨夫	高橋 義博	葛西 四郎
○32年	川又 俊夫	國井 栄次	平沢 正一	伊藤 善次
	溝口 知昭	木村 敏一	坂本 俊雄	柴田 勇治
	島田 実	小室 秋生	田崎 耕八	田口 嘉男
	金子 栄	羽鳥 宏	榊原 康夫	矢野 睦男
	武田 俊郎			
○33年	照沼 義光	伊沢 義隆	山崎 勝雄	三浦 陽
	荒川 清	伊藤 誠二		
○34年	藤田 邦男	門田 紀	簗 能晴	高橋 広
	高野 史雄	結城 佑		
○35年	高野 久弘	高根 清	小島 正	
○36年	柏木 尚	笹生 右一	上月 秀俊	松本 延四郎
	横山 馨	田尻 仁一	森永 隆宏	木藤 一郎
	橋本 正直			
○37年	飯岡 弘道	宮沢 信夫	森 秀一	野本 光彦
	服部 則男	田北 崇晴	阿部 徳治	高橋 忠之
○38年	大原 祥生	駒場 方耀	佐藤 孝一	大原 節
	今橋 富美男	広瀬 行一	矢嶋 国男	
○39年	寛 逸男	持田 幸武	磯崎 洋子	木村 彰良
	久保 昌也	中村 登		
○40年	阿部 国士	佐藤 正俊	大塚 由則	大塚 義夫
	熊倉 通	宮崎 洋和	大泉 雅靖	寺 紘一
○42年	菅谷 禎男	森田 徹郎	瀬谷 重信	
○45年	鈴木 賢一			
○46年	飯塚 英一	井村 豊	大崎 孝明	
○48年	山田 実			
○54年	佐々木 秀郎	坂倉 次男		
○61年	伊藤 誠二			
○63年	柴野 直樹			

編集後記

前号の編集後記で述べましたように、今号からは出来るだけバラエティに富んだ内容を心がけて編集したつもりですが、出来上ってみますとまだまだこれからだなあーの感しきりです。

それでも表紙はカラーにしたおかげで会報の体裁としては見劣りしないなど自画自賛しております。

多賀工業会も創立60周年、人間で云えば還暦を迎えました。東京支部の会員の中にも、若手あり、熟年あり、シルバーエイジあり、60年のあゆみがあります。会員相互の親睦を深め、会報をより充実したものにするために、原稿を随時募集しております。特に、若手及び熟年の方の投稿をお待ちしております。紀行文、随筆、技術論、等何でも結構です。事務局（近江）宛に、ご寄稿下さい。

東京支部会報【第2号】

発行 平成11年3月20日

発行者 渡辺 益男

(株)渡辺建築事務所 内

TEL. 03-3987-1946(代)

編集者 石川 守竹